

## 2020. 2. 2 第一主日聖餐礼拝

### I 歴代誌 15:16, 25-29 「賛美の豊かさを味わう」

#### 聖書

16 ダビデはレビ人の長たちに命じて、彼らの同族の者たちを歌い手として任命し、琴、豎琴、シンバルなどの楽器を手に、喜びの声をあげるようにさせた。

25 こうしてダビデは、イスラエルの長老たち、千人隊の長たちとともに行って、喜びをもって主の契約の箱をオベデ・エドムの家から運び上げようとした。

26 神が主の契約の箱を担ぐレビ人を助けてくださったとき、彼らは雄牛七頭と雄羊七匹をいけにえとして献げた。

27 ダビデは上質の亜麻布の上着をまとっていた。箱を担ぐすべてのレビ人、歌い手たち、歌い手たちの歌唱の導き手ケナンヤも同様であった。ダビデは亜麻布のエポデを身に着けていた。

28 全イスラエルは歓声をあげ、角笛、ラッパ、シンバルを鳴らし、琴と豎琴を響かせて、主の契約の箱を運び上げた。

29 こうして、主の契約の箱はダビデの町に入った。サウルの娘ミカルは窓から見下ろしていたが、ダビデ王が飛び跳ねて喜び踊っているのを見て、心の中で彼を蔑んだ。

#### はじめに

神さまを賛美することは私たちの力です。先週の礼拝で、賛美する場所としてふさわしい場は教会(礼拝の場)とそれぞれが置かれた日常の場を考え、主に後者に重点を置いてみことばを学びました。今日は前者、すなわち礼拝の場での賛美について考えてみましょう。礼拝の中では必ず賛美がささげられますが、それはいつから始まったのでしょうか。礼拝賛美の起源に迫るとき、そこから賛美の豊かさを知ることができます。

## 1. 神の箱に関わる経緯

今日の聖書箇所は I 歴代誌 15:16-29 を取り上げました。17-24 節には今でいう聖歌隊のような賛美チームの結成が記されています。司会者にはその部分を省略して朗読していただきましたが、あとでこの部分にも触れますので心に留めておいてください。

さて、16-29 節にはダビデが自分の町エルサレムに神さまの臨在のしるしである「神の箱」(契約の箱とも言う)を運び入れたときの喜びが記されています。その喜びようは尋常ではなく、サウル王の娘ミカルから失笑を買うほどでした(15:29)。でも、ダビデがそこまで喜んだのには理由があります。それは、神の箱をエルサレムに運び入れるまでに長い苦難の道があったからです。

イスラエルにサムエルという預言者がいた頃です。初代の王サウルが選ばれる前の時代です。そのころ神の箱はシロという場所にありました。そこに敵のペリシテ人が攻め入って来て神の箱を奪って行ったのです。ペリシテ人によって神の箱は、シロからエベン・エゼルに移され、さらにアシュドテ、ガテ、エグロン、キルヤテ・エアリムへと次々に移されて行きました。なぜ移されたのかというと、神の箱が移されるたびにその場所に災いが及んだからです。ペリシテ人はイスラエルから神の箱を奪ったところまでは良かったのですが、箱を移すたびにそこに災いが及ぶものですから、たまらなくなり最終的にはイスラエルに神の箱を返してきたという経緯があるのです。最後はキルヤテ・エアリムという場所に神の箱が戻り、そこに 20 年間安置されました(詳細は I サムエル記 4-7 章参照)。

サムエルの時代から時が流れ、イスラエルの初代の王サウルの時代を経て、ダビデが王位に就いたとき、ダビデは神の箱を都エルサレムに運び入れようと計画します。これはある意味、一大国家プロジェクトと言える大変重要な行事となりました。しかし、この計画はすんなりとは行かず、運び込む途中で大失敗をしてしまうのです。神の箱を荷車に載せて運び込もうとし、ウザとアフヨという人が荷車を御すことになりました。途中、牛がよろめいたた

め荷車が傾き、ウザは神の箱が倒れないように、手で箱を押えたのです。すると、ウザが聖なる箱に手を触れたことに対し主の怒りが臨み、その場でウザは死んでしまいました。これを見たダビデは恐ろしくなって、エルサレムに運び入れることを中断し、オベデ・エドムという人の家に回したのです。神さまはオベデ・エドムの家を大いに祝福してくださり、結果三ヶ月間神の箱はオベデ・エドムの家に留まりました（詳細はⅠ歴代誌13章を参照）。

ダビデはオベデ・エドムの家が祝福されていることを見て、今度こそ神の箱をエルサレムに運び込もうとしました（15:25）。ウザの失敗は、神の箱を運ぶ方法が主のことばの通りでなかったからでした。それを改めて、「担い棒を肩に載せて神の箱を担いだ。」（15:15）とあるように、身を聖別したレビ人たちによって主が命じられた通りに運び込まれたのです。

## 2. 神の箱のエルサレム安置

このような経緯を辿り、神の箱はエルサレムに安置されました。そこに至るまでの苦勞を知るとき、エルサレムに神の箱が運び込まれたとき、どれほど大きな喜びが民全体に沸き起こったのか想像に難くありません。「ダビデはレビ人の長たちに命じて、彼らの同族の者たちを歌手として任命し、琴、豎琴、シンバルなどの楽器を手に、喜びの声をあげるようにさせた。」（16節）、「全イスラエルは歓声をあげ、角笛、ラッパ、シンバルを鳴らし、琴と豎琴を響かせて、主の契約の箱を運び上げた。」（28節）のです。神の箱をオベデ・エドムの家からエルサレムに運び入れるときの行列が17-24節に記されています。楽器を奏でつつ賛美の奉仕をする者を中心に、箱や幕屋にかかわる荷物係や護衛など、組織的に編成されています。神さまを礼拝するという行為は思い付きや行き当たりばったりではなく、きちんと準備されてささげられるものです。毎週の礼拝も、背後で礼拝の祝福を祈ってくださる愛兄弟の祈りとともに礼拝の司会者、奏樂者、祈禱者、説教者、受付係、案内係などの一つ一つが備えられて礼拝がささげられているわけです。

ダビデは神さまを礼拝するために歌声や角笛、ラッパ、琴、豎琴、シンバルなどの様々な楽器を用いました。私たちの礼拝では、今はオルガンとピア

ノの伴奏で賛美をささげていますが、他の楽器で礼拝を構成することがあってもよいと思います。青年たちが主体となる礼拝スタイルはキーボード、ドラム、ギター、ベースといったバンド形式のものが多く見受けられます。数年前の東海聖会では特別賛美として琴が奏でられました。また、ある教会でご奉仕したときは尺八で特別賛美がささげられました。洋楽器による賛美が多い中、和楽器による賛美は味わい深いものがありました。さらにこの2月9日に浜松で行われる遠州聖会では、毎年子どもたちの聖歌隊があると聞いています。10年以上前になりますが、豊田牧師会でも松坂屋のクリスマスキャロリングのときに子どもたちの聖歌隊を編成しました。現在の豊田教会には子どもたちが少ないので子どもの賛美は難しいですが、礼拝の中で子ども賛美歌を歌うのも良いでしょう。願わくは、私たちの教会にも子どもたちの賛美チームが生まれる時が来たら嬉しいですね。大人も子どもも神さまを賛美する形は多様であって良いことを思います。

多様な形を認めながらも、賛美の中心は神さまへの感謝と喜びにあることを忘れてはいけません。ダビデが神の箱をエルサレムに運び込むまでにどれだけ苦労したのか、それを知るなら、ダビデが全身で喜びを爆発させたのも頷けます。神さまへの感謝と喜びが賛美の中心になければならないのです。私たちが毎週ささげる賛美はどうでしょうか。先週の歩みを振り返り、色々なことがあったけれどもよくここまで来れたと、神さまに感謝して賛美しましょう。問題や課題を抱える身であっても、心には感謝と喜びをもって主をほめたたえようではありませんか。主は私たちの感謝と喜びの賛美を喜んで受け止めてくださるお方です。

### 3. すばらしい礼拝での賛美

契約の箱をエルサレムに運び入れたダビデは、主への感謝と礼拝を次のように表しました。I 歴代誌 16:23-36 を引用して締め括ります。

「全地よ、主に歌え。日から日へと、御救いの良い知らせを告げよ。主の栄光を国々の間で語り告げよ。その奇しいみわざを、あらゆる民の間で。主は大いなる方、大いに賛美される方。すべての神々にまさって恐れられる方

だ。まことに、どの民の神々もみな偽りだ。しかし主は天をお造りになった。威厳と威光は御前にあり、力と喜びは御住まいにある。もろもろの民の諸族よ、主に帰せよ。栄光と力を主に帰せよ。御名の栄光を主に帰せよ。ささげ物を携えて、御前に来たれ。聖なる装いをして、主にひれ伏せ。全地よ、主の御前におののけ。まことに、世界は堅く据えられ揺るがない。天は喜び、地は小躍りせよ。国々の間で言え。「主は王である」と。海とそこに満ちているものは、鳴りとどろけ。野とその中にあるものは、みな喜び躍れ。そのとき、森の木々も喜び歌う。主の御前で。主は必ず、地をさばくために来られる。主に感謝せよ。主はまことにいつくしみ深い。その恵みはとこしえまで。言え。「私たちの救いの神よ、私たちをお救いください。国々から私たちを集め、救い出してください。あなたの聖なる御名に感謝し、あなたの誉れを勝ち誇るために。」ほむべきかな、イスラエルの神、主。とこしえから、とこしえまで。それから、民はみな「アーメン」と言い、主をほめたたえた。」

毎週の礼拝が、ダビデが告白しているような礼拝となりますように。救いの恵みを高らかに賛美し、その恵みをあまねく伝える礼拝となりますように祈り求めましょう。

## 結び

毎週ささげられる礼拝の賛美が喜びに満ちたものとなりますように。先週の歩みを振り返りつつ、そこに注がれた主の恵みと助けを思うとき、感謝が湧き出て来ます。その感謝を礼拝の冒頭の賛美に表わすことができたなら、何とすばらしいでしょうか。礼拝の賛美の質が高められることで、礼拝全体が祝福されます。礼拝で心を込めて主をほめたたえると賛美の恵みで心が満たされて、来週の礼拝が待ち遠しくなるのです。礼拝での賛美の恵みを広めて行きましょう。